世界の街角から

人としての尊厳を保つべく老いる前に高齢生活の場を考える

デンマーク王立美術アカデミー建築学校　在学中

鎌田貴子

夢がかなうまでに五年の月日が流れた……

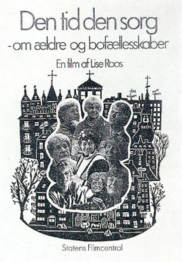
前回、ここデンマークにおける「バリアフリー」を巡る状況、その背景について書いてみましたが、実はその裏にもっと深い歴史・人間模様があります。それは「バリアフリー」とは何か、「ノーマライゼーション」とは何か、なぜ必要なのか、という質問からくると思います。『すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である』《国連の世界人権宣言》。

バリアフリー・ノーマライゼーション、それは人が人としての尊厳――誰もが平等に持っている尊厳――を保つためであり、そしてそれは、自分のことは自分で決定することに通じます。

それでは、デンマークにおける例を見てみましょう。

「それは面白いかもしれない。とりあえずやってみましょう」。この言葉にミッドゴーズグルッペンのメンバーがどれほど喜んだか計り知れません。一九八一年に勉強会を開始してからもうすでに三年が経過し、二十六市町村から「ノー」の答えをもらっていたのですから。

最初、この勉強会は、「フォルケホイスコーレ」と呼ばれる生涯教育の一環とも言える、公共のカルチャーセンターのようなところから始まりました。何でもいいからテーマを決めて、自分たちで研究を進めるコースです。



ミッドゴーズグルッペンの九人の居住者たち。これは、このグループをテーマに映画が上映された時のポスター。

リッシーハンセンを初め、女性三人が選んだテーマは「シニア(高齢者)の暮らし方」でした。いつまでも自立して新鮮でありたい、そして年老いて他人に生活の場を決められる前に、自分たちの家を追求しようと言うのが主旨でした。シニア同士助け合い、親しく暮らすというコーハウジングに答えを見つけた彼女らは、興味のある人を新聞で募り、アッという間に二十人が集まりました。自分たちの本当に欲しいものは何か、それを満たすには、どこにどういう形のものを作ればいいのか。そのための資金はどうするか。時を変え、場所を変えて話し合われました。

その結果、資金が十分にない彼女らの案は、日本で言う公団住宅の一部にグループとして入居する、そして自分たちのコモンスペース（共有スペース。キッチンがついたグループ用のリビングルームのようなもの）を獲得する。誰かが欠けた時は次に誰が入居するかを決定できる権利を各自が持つというものでした。

しかし、二十六市町村に協力を申し出ても、またいくつもの住宅協会にあたっても、「面白い案だけれども無理です」との返事ばかり。ところが、ある会で偶然一緒になった住宅協会の方から「OK」が出ました。その後、市町村の方がコモンスペース分を負担してくれることになりました。こうしてメンバー九人が無事引越しできたのは、勉強開始から五年。長い日々でした。しかし、リーシィーはこう語ります。「つらい日々でもありましたが、あの五年という日々がなかったら、自分たちの本当に欲しかったものは見つからなかっただろうし、この月日のおかげでお互いのことがよく分かり、結束が硬くなりました」

クリアティブ・シニアボーのコモンスペース。天窓のため、とても明るく気持ちがいい。

高齢者自身が自らの暮らしを考え始めた

この例が社会に及ぼした影響力はすごいものでした。その後、公団の一部に次々とシニアコーハウジングが入ったり、市町村からの援助が出る例が多くなりました。そして何より面白いことに、シニアのグループがどんどん勉強会を開き、自分たちにあった家を追求し出したことです。市町村の方もシニアを招き、どういう形がこの街に合っているかを問うようになりました。一九八七年、これ以上ナーシングホームを作らないという政策の下、シニアがどう暮らしていけばいいかを探っていた行政側にとってもこれは朗報でした。

アンデルセンの生地として有名なオーデンセ市でも、ソーシャルワーカーが率先して開いた勉強会から三つのシニアコーハウジングが生まれました。ここでも勉強開始から入居まではほぼ三年の日々が流れています。この三つにはそれぞれ特徴があります。

集合住宅の真ん中にあるアクティビティセンター。カフェ・パーティー室の他に理学療法室等もある。

物づくりが好きな仲間で出来た家は十二世帯。名前もクリアティブ(創造的)・シニアボー（シニアの住居）。真ん中に天窓のついた大きな作業室兼コモンスペースがあり、ここで大きなパーティーも開かれます。

もう一つは、今まで郊外の大きな一軒家に住んでいた人々が、オーデンセの中心からバスで十分程のところにある美しい自然の中にグループ(二十世帯)で住むことにしたものです。家は小さな庭付きです。

最後の一つは、ハンディキャップを持つために、ナーシングホームと妻がいる自宅とで別々に暮らしている人たちが中心になって「ハンディキャップを持つ人も、シニアも共に助け合って一緒に暮らしていこう」という主旨で集まった人々です。他の世代も交じった計五十世帯ほどの中にシニアが二十二世帯住んでいます。

自分にあった暮らし方、家づくりを追求する

さて、世帯数がこれほど多くなくても、例えば友人三人で自分たちに合った大きな家を買い取って住んでいる人たちもいます。「私たちは家族生活の良い点だけを楽しんでいるの。私たちは一緒だけれど、自由なの」と、ここの住人は言います。築二五〇年以上も経つ修道院が十一世帯用の住宅に改造され、その歴史、美しさに魅かれ、引っ越したシニアもいます。

学校の一部がシニアハウジングになった例。教室一つ分が、ちょうど一人の居室に改造されている。

このように、シニアにとっての良い形、自分の望む形を追求していくと、市町村側もいろいろ検討し、さまざまなものを提供するようになりました。コーハウジングタイプを新しい集合住宅の一部に盛り込んだものもよく見られるようになりました。

シニアハウジングに限らず「家」「暮らし方」は、人によってさまざまですが、それは自分で追求しないと得られません。「家は、スーパーマーケットでこれがいいと選ぶような物ではない」とは、デンマークで数多くの集合住宅を手がけた建築家の言葉です。

あなたはどういう家で、どういう暮らし方を、誰としたいですか？